写真展

戦禍の果てに
アンゴラの子どもたち

27年間の内戦はやっと終わったというのに、子どもたちはなぜ、死んでゆかなければならないのだろう

写真：朝日新聞社／小林裕幸

2003年 5月 19日(月)—5月 23日(金)

〔展示は初日 13時より　最終日 15時まで〕

於 逗子市役所ロビー

(JR横須賀線逗子駅徒歩3分、京浜急行新逗子駅徒歩1分)

主催：WFP応援団　　後援：国連世界食糧計画(WFP)日本事務所・日本WFP友好協会

私の見たアンゴラ

私がアンゴラを訪れたのは今年8月だった。27年にも及ぶ内戦に終止符を打って4カ月、しかし私の見たアンゴラは、和平とはほど遠いものだった。

荒廃しきった農地、戦闘で亡くなった働き手。国際機関の行く手を地雷が阻み、援助の手が届かない地域が無数に広がる。「援助の空白地帯」では、飢餓が子どもたちを直撃する。食料も医療品もないまま、小さな命が連日のように失われていった。

写真を撮った直後に息を引き取った女の子。9人の子どものうち、8人を内戦で失った母親。そんな光景を前に、悲しみとも怒りともつかない感情で、胸が締め付けられた。

人々が失ったものや、背負った傷は、あまりにも重い。子どもたちや母親たちに笑顔が戻るのはまだまだ先のことなのだ。

取材にあたっては、WFPや国境なき医師団のスタッフの方たちに多大なサポートを頂いた。心からお礼を申し上げたい。

そして最後に、この写真展がアンゴラの現状を少しでも知ってもらうきっかけになれば幸いだと思う。

2002年12月　小林　裕幸

アンゴラの歴史

1975 年、ポルトガルから独立。独立を機にアンゴラ解放人民運動(MPLA)が権力を掌握し、アンゴラ全面独立民族同盟(UNITA)との間に内戦が勃発しました。社会主義政権である MPLA をキューバ・旧ソ連が、UNITA 連合軍を南アフリカと米国が支援するという、当時の冷戦構造を多分に反映した対立でしたが、1988 年 東西両陣営がアンゴラから撤退。その時点で既に 35 万の人々が内戦で命を落としていたと言われています。1991 年、サビンビ UNITA 議長とドス・サントス大統領の間で和平協定が結ばれますが、UNITA が選挙に敗れるとサビンビが選挙結果に不服を申し立て、再び内戦が勃発。1994 年、政府と UNITA の間に新たな和平合意が結ばれ連立政府が樹立しました。依然不安定な政情の中、1998 年に内戦が再燃、1999 年には国連アンゴラ監視団も撤退。2002 年にサビンビ議長が政府軍との戦いで死亡し UNITA が弱体化、2002 年 4 月 4 日、停戦合意の署名が行われました。

アンゴラの現状

こうして 27 年ぶりに和平が成立したのですが、この間国内に敷設された地雷は 400 万個とも 500 万個とも言われ、インフラはことごとく破壊され、国土は荒れ、人々は散りぢりになり、数多くの孤児、寡婦を生み出しました。暴力と飢餓にさらされてきた数多くの、最も貧しい、最も弱い人々に援助の手を行き届かせるには、国際社会の、官民一体となった大きな努力と、多額の資金を必要としています。

WFPとは？

国連世界食糧計画(WFP)は飢餓撲滅を目的とした国連最大の食糧援助機関であり、また最大の人道援助機関です。1961 年国連総会で設立され、イタリアのローマを本部としています。1996 年、横浜のみなとみらい地区に日本事務所が設立されました。世界で 8,000 人に及ぶ職員が活動し、2001 年には 82 カ国で 7,700 万人に食糧援助を行ないました。

WFP応援団は国連世界食糧計画(WFP)の食糧援助活動を支援するボランティア団体です